

J. デューイの芸術論にみる芸術の分類についての考え方

西園芳信

(キーワード：芸術的経験、芸術分類、媒介、自動芸術、形成芸術)

I 研究の目的と方法

日本の学校のカリキュラムにおける芸術の教科は、音楽と図画工作・美術からなる。ところが、近年、学校の週五日制による時間数削減や総合的な学習の時間の設置、そして、基礎学力育成の観点から算数・数学や理科等の教科の時間数増加、それに、国際的な視野の中で活躍できる日本人の育成の観点から小学校での外国語活動（英語）の必修化等と、時代の要求に即して新たなカリキュラムの編成が実現されている。こういった中で、音楽や美術の教科の時間数は削減の傾向にあり、また、音楽や図画工作・美術を芸術として一つの教科にし、その中から生徒に選択させるという考え方も話題にされてきた。

一方、音楽と図画工作・美術は、時間芸術と空間芸術として、専門家によってその表現様式が様々に研究され作品が生み出されてきた。そして、それらの表現方法を学ぶ専門学校や専門大学が制度化され、表現技法が受け継がれてきた。このようなことは、音楽や図画工作・美術の教員を養成する教員養成大学においても同様であり、音楽と図画工作・美術の教育内容やその指導方法は、異なる専門集団によって研究と教育がなされている。つまり、音楽と図画工作・美術は、文化の継承方法としては、完全に分離されそれが制度化されている。

今後、学校のカリキュラムにおいて、音楽や図画工作・美術の時間数が削減されると仮定したときに、音楽と図画工作・美術を芸術として一つの統合した教科とするという選択も出てこよう。しかし、音楽と図画工作・美術の表現様式を教育の観点から見たときには、そこには大きな壁があり、芸術として共通の部分がなかなか見いだせない。学校教育において、子どもに豊かな芸術的経験を与えることをねらいとしたとき、音楽や図画工作・美術の芸術としての共通性と違いを探ることが基礎的な研究として求められる。

そこで、本研究では、デューイの芸術論にみる芸術の分類について、その考え方を明らかにし、学校の芸術教育のカリキュラムやその展開方法に示唆を得ることを目的とする。まず、従来の芸術の分類について取り上げ、次にデューイの芸術の分類についての考え方と彼の従来の芸術分類への批判を述べ、最後にデューイの芸術分類（建築、彫刻、絵画、音楽、文学）に即して、諸芸術の媒介の特徴と表現的特質について述べる。そのための主な文献は、J. デューイの『経験としての芸術』(*Art as Experience 1934*)の第10章「芸術の多様な実体」(THE VARIED SUBSTANCE OF THE ARTS)を中心に取りあげる。

II 従来の芸術の分類（芸術の類型）

日本において、デューイの芸術論にみる芸術の分類の考え方についての論文は、管見する中では見あたらない。そこでまず、従来の芸術の分類の考え方について、『美学事典』¹⁾（竹内敏雄編集、1970年）の「芸術類型」を基に、その一部をまとめてみる。

1. 類型学的立場による分類

この立場の分類は、経験的美学以来の科学的・実験的基礎に立脚しつつ、記述的具体的区分をもって諸芸術の関係に実質的な体系秩序を確立しようとするものである。

- (1) **自由芸術と応用芸術** この分類の考え方は、芸術の本来の美的効果と同時に実際の効用の点から、その目的に奉仕するか否かによって次の二つに区分するものである。①自由芸術（音楽・舞踊・絵画・文学・彫刻等）、②応用芸術（建築・工芸・絵画・美術）。
- (2) **空間芸術と時間芸術** この分類の考え方は、カントが純粋な直観形式として空間と時間とを区別したそれを拠り所にするもので、我々の感覚は、アプリアリにこの時間と空間に規制されているかぎり、芸術現象もまた空

間と時間によって秩序づけられているとするものである。この分類の考え方によって、芸術を次のように三つに区分する。①空間芸術 ア、三次元的なもの（建築・彫刻）、イ、二次元的なもの（絵画・平面彫刻）、（これらの芸術は造形芸術に整理される。）②時間芸術（音楽・文芸）、③時空間芸術（演劇・映画・舞踊）、（②時間芸術と③時空間芸術はミューズの芸術に整理される。）

(3) **事物的芸術と非事物的芸術** この考え方は、芸術品の現実界に対する関係からみた分類で、芸術を次の二つに大別する。①事物的芸術。これは、現実の世界に存在する一定の事物（人間とその活動を含む）を対象とし、それに相応する具体的形態において模写する芸術として、彫刻・絵画・文芸・演劇・映画等が挙げられるとする。従って、これらの芸術は、模倣芸術・再現芸術・描写芸術・対象芸術と呼ばれるとする。②非事物的芸術。これは、芸術を現実の事物に束縛されず、専ら感情・気分のような主観的状态を抽象的形式において表出するものとし、建築・装飾・音楽等を挙げる。従って、これらの芸術は、非模倣的芸術・表現的芸術・気分芸術と呼ばれるとする。

2. 感覚領域による分類

この立場の分類は、先の空間芸術・時間芸術・時空間芸術の区別に照応する芸術の分類で、次のように感覚領域によって区分する考え方がある。①視覚芸術（建築・彫刻・絵画・平面彫刻）、②聴覚芸術（音楽・文芸）、③視聴覚芸術（演劇・映画・舞踊）。

以上の従来の芸術の分類によると、図画工作・美術の絵画は、空間芸術、視覚芸術、又は、事物的芸術等に、音楽は、時間芸術、聴覚芸術、又は、非事物的芸術等に分類される。しかし、これらの分類では図画工作や美術の絵画と音楽との芸術的経験の共通性や違いはなにも見えてこない。

Ⅲ デューイの芸術分類の考え方と従来の芸術分類への批判

1. デューイの芸術分類の考え方

デューイは、芸術の分類についても、彼の経験論に即して展開している。すなわち、芸術的経験は、有機体なる自我と外界との継続的・蓄積的相互作用の産物であるという理論である。このような彼の芸術論から、デューイは、諸芸術の分類については、それぞれの芸術が持つ「媒介」(medium)によって分け分類するという方法を取る。「橋を作るには石や鉄鋼やセメントをもってするように、それぞれの媒介にはそれぞれの力がある、能動的または受動的な力、積極的または消極的な力があるということ、そして、芸術の種々な特性を識別する根拠は、媒介として用いる素材特有の力を芸術が開発するということにあるということである²⁾。」

そして、芸術表現を「媒介」という見地からみると、諸芸術は大きく芸術家の人間の有機体、即ち身体を媒介とする芸術と他方肉体以外のものにずっと多くを依存する芸術、言い換えると自動的芸術と形成芸術 (automatic and shaping arts) とにおおざっぱに区別できると言う³⁾。自動的芸術は、舞踊や唄、唄と結びついていた文芸の原型たる作り話等で、形成芸術は、道具を使って外物を処理するために肉体を働かせて作る彫刻や建築等である⁴⁾。

2. 従来の芸術分類に対する批判

(1) 従来の芸術分類に対する批判の基本的な考え方

このような芸術の分類の考え方からすると、デューイは従来の芸術の分類（感覚器官による分類、時間空間による分類、再現的芸術と非再現的芸術等）は、これを内部 (inside) から述べているとみる⁵⁾。内部からと言うのは、媒介が現にあるようになったのはなぜであり、また、いかにしてについて尋ねることなく、それを単に既成事実として受け取っているという意味である⁶⁾。そのため、従来の芸術の分類は、①知的理解を混乱させる。②一つの芸術と他の芸術とのかかわりやつなぎ目を無視する。③その結果、そこには、乗り越えられない障害物ができ、それが、芸術を理解する妨げとなるとデューイは批判する⁷⁾。

(2) 各分類方法への具体的批判

ここで、デューイの従来の芸術分類についての具体的批判を取り上げてみる。

①感覚器官による分類（視覚芸術・聴覚芸術・視聴覚芸術）

詩は、吟遊詩人が耳に訴えるものとした作品として生まれたのである。それが、現在は、耳に訴える音声を除いて存在している。つまり、詩は、聴覚（音声）を主に生まれたが、現在は、それが文字化され、外観は視覚的のものとして⁸⁾。このように詩は、発生のときとそれ以降の発展によって表現の訴え方が変化しており、そ

れがどういう感覚器官によって成立しているかを見るだけでは、芸術本来の特質は見えないと言うのがデューイの感覚器官による芸術分類に対する批判である。

②時間・空間による分類

この時間・空間による分類は、デューイによると、結果からみた分類で、また、外部からなされた分類であり、この分類では、作品の美的内容の解明はできないと、次のような事例で批判する。例えば、建築・彫刻・絵画は、空間芸術と分類されるが、これでは、建築・彫刻・絵画の時間的性質を否認することになる。また、唄や詩を時間芸術と分類すると、これでは、唄や詩の空間的性質を否認することとなる⁹⁾。時間・空間による分類は、「外的な物理的存在としての芸術的所産の特性を元として分類がなされたものである¹⁰⁾。建築は、「ちっぽけな小屋でさえも、時間的性質が加わるのでなければ、美的認識と内容となりえない¹¹⁾。」

デューイの芸術論によると、芸術の実体には、共通に①媒介、②包括的な質の全一体、③時間と空間が認められると言う考え方である。このことから、時間芸術にも空間的性質が認められ、逆に空間芸術にも時間的性質が認められるとする。このようなデューイの芸術論からすると、芸術を時間芸術と空間芸術に区分することは、芸術の実体を認識するものにはならないという批判である。

③混合芸術（時間芸術＋空間芸術）

時間空間による分類では、舞踊は時間芸術でもあり空間芸術でもあるといわなくてはならない、とデューイは次のように批判する¹²⁾。「それぞれ独自の、単一な、統一ある存在たろうとすることはすべての芸術作品の本性である。だから、この『混合』芸術という概念はあらゆる堅苦しい分類事業の陥る不合理な帰結¹³⁾」である。この分類法は、無理に分類しているもので論理に合わない「帰謬法」に陥っているという批判である。

④再現芸術と非再現芸術による分類

絵画・彫刻・文学・映画等を再現芸術とし、音楽・建築・装飾等を非再現芸術とする分類方法である。この分類方法について、デューイは、次のような事例で批判する。音楽や、建築は、非再現芸術とされる。だが、音楽は、戦争や悲哀や凱旋や性的興奮などの事柄や光景によって引き起こされる愛情や情的印象を音で再生する¹⁴⁾。そして、建築としての大会堂は、森の中の樹木を再現する。しかし、自然物の形状の再生の意味では建築は再現ではない。自然物の形状としての形、柱状、円筒状、矩形、球状を利用する。建築は、この形の効果を表現するのである¹⁵⁾。

IV デューイの芸術分類

1. 芸術分類の考え方

デューイの芸術分類の考え方は、先に述べたように、表現の媒介の見地から芸術をみるものである。楽器の音色、人の声があるように、音は音で独特の働きをする。これが音楽の媒介になる。橋をパステルでは、作らない。橋を作るには、石や鉄鋼やセメントを媒介とする。だが、表現の媒介は、連続している。スペクトル状の七原色を見分けるように芸術を区分しうる。だが、どこで芸術が始まり、他の芸術終わるかは、的確に語り得ない¹⁶⁾。デューイは、このように媒介によって芸術を分類する方法を取るが、しかし、媒介の区別によって芸術が截然と区別されるのではなく、そこには、芸術としての連続性があると見ている。

2. 分類の方法

先述したようにデューイは、芸術表現を媒介という見地から捉え、諸芸術を大きく次の二つに区分する。それは、人間の有機体（心身）を媒介とする芸術と肉体以外に多くを依存する芸術とする考え方で、前者が自動的芸術で後者が形成芸術となる¹⁷⁾。

①自動的芸術。これは、舞踊、唄、唄と結びついている文芸の原型としての作り話し等で、人間の身体を媒介とする芸術が対象となる。

②形成芸術。これは、彫刻・建築等、直接的に肉体は使用しないで、道具を使って外物を処理して作る芸術が対象となる。

3. 芸術の分類の具体（媒介の使い方による）

(1) 建築 (architecture)

建築の媒介は、セメント、木材、石、鉄鋼、ガラス、煉瓦、藁草等である¹⁸⁾。これらの建築の媒介は、天然の

原料であり、その原料の自然力を生かす点に特徴がある。「建築を特色づけているその特徴はその媒介が（比較的）自然のままの原料であり、自然力を基本的な状態で保持した原料であると言う点である¹⁹⁾。」

しかも、建築の使用する自然力の範囲は広範で直接的である²⁰⁾。この点も、他の芸術と異なる特徴で、建築は、この自然力によって推進力や重力などを表現する。「建築が自然力を使用することは疑いない。建築に全く比肩しうるほど大規模に応力やひずみ、推進力や逆進力や、重力や光や凝集力を表している芸術は他にない。しかも、他のいかなる芸術にもまして建築はこれらの力を直接取り上げるのであって、これを間接に用いるのでもなく、代行するのでもない²¹⁾。」そして、建築は、媒介の自然力によって、自然の構造を表現するとともに、安定性と持久性などの特質を表現する。「建築は自然そのものの構造、組織を表現するのである。（中略）それゆえ、あらゆる芸術のうちで建築は具体的存在の安定性と持久性との表現ということに対して最も密接な関係にある²²⁾。」

以上から、建築の媒介は、天然の原料であり、その原料の自然力を生かすことで、自然の構造を表現するとともに、安定性や持久性といった特質を表現するものと言えよう。

(2) 彫刻 (sculpture)

彫刻の媒介は、石・木材・鉄等である。デューイは、彫刻は、建築と密接に関連していて、建築は、大会堂が政治や宗教の儀式的場所になるように人間の生活を直接導くが、彫刻は、個人の武勇や献身の業績が題材になるように個別化された生活を表現すると次のように言う。「彫刻は建築の記録的記念碑的な面を取り出して、これを強調する。彫刻は、言わば追憶の側面を専ら担当している。建築は生活の中にはいり、その形成を助け、生活を直接導くが、彫刻と記念碑は過去の武勇や献身や業績をわれわれに思い起こさせるとき、その働きをする²³⁾。」「建築は人間の集団生活を表現する。（中略）だが、彫刻は個別化された形の生活を表現する²⁴⁾。」

そして、デューイは、建築と彫刻の表現の違いは、統一性にあると言う。「彫刻も建築もともに統一性を持ち、それを表現しなければならない。しかし、建築の統一性は夥しく多種多様な要素の集合からなる統一性である。彫刻の統一性はもっと単純で、限定されたものである²⁵⁾。」

次に、デューイは、彫刻の最も特徴的な点は、普遍と個物の融合にあり²⁶⁾、このことで、彫刻が表現する感情的特質は、「完了、重々しさ、静止、釣合、平穏である²⁷⁾。」と言う。このことは、デューイは、ギリシャ彫刻の理想化された人間の肢体に最も典型的に表現されていると見る²⁸⁾。

以上から、彫刻は、石や木材等を媒介として、個人的生活を題材としながら普遍と個物を融合することで、感情的特質として完了、静止、釣り合い等を表現する芸術と言えよう。

(3) 絵画 (painting)

絵画の媒介は、色彩 (color) である。絵画は、色彩を媒介として、「自然や人間的状況を光景 (spectacle) として表現²⁹⁾」する。「この光景は眼を中心とした生物と光や純粋な色、反射し屈折して成った色との間の相互作用によって生ずる³⁰⁾。」

デューイは、この絵画的要素（光と陰の揺曳）は、建築や彫刻等の芸術にも存すると言いつつ、しかし、これらの芸術においては、それは、従属的、副次的であると言う³¹⁾。

絵画は、この色彩を媒介とし、情景としての世界を表現する。「絵画は情景として現れるようなあらゆる事物や状況を表現することができる³²⁾。」そして、絵画が表現する特質は、事物の性質 (qualities) および状相 (aspect) である。「例えば水の流動性、岩の頑丈さ、木のもろくて、しかも抵抗力あるさま、雲のたたずまい、その他われわれをして自然を光景とし表現として味わい楽しませるさまさまざまな状相など、すべてこれらの性質および状相を視覚によって伝える絵画の抜群の力³³⁾」を語ることができる。

以上から、絵画は色彩を媒介とすることで自然のあらゆる情景を表現でき、その表現的性質は事物の性質や状相であると言えよう。

(4) 音楽 (music)

「音楽は音 (sound) を媒介とする³⁴⁾。」デューイは、音楽の媒介となる音の特性について、われわれに衝撃や不安をもたらすものであると次のように言う。「音は、身体の外から来るが、音そのものは身近で、密接なものである。音は、有機体の興奮であり、われわれは振動の衝撃を全身であまねく感ずる。音は変化を報ずるものであるから、じかに直接的な変化をひき起こすものである。足音や小枝の折れる音や叢のざわめきは敵意の動物や人間が加える攻撃、或いは殺戮をさへ示している。（中略）音は差し迫ったこと、発生しかかったことを、

おそらくやがて起こるであろうことのきざしとして伝える。視覚よりも聴覚のほうが結果について実感をはるかに多く宿している。切迫感はいまい、不確実という暈にいつも覆われている。これらはすべて激しい感情的動揺が生ずるのにもってこいの条件である³⁵⁾。]

音楽は、このような音という感覚的性質をもったものを媒介とし、これをハーモニーや旋律等によって「形式上の関係を用いることによって、この感覚的素材を実際の活動から最も遠く隔たった芸術に変えることができる³⁶⁾。」そして、「かような状態の中で、もろもろの音は互いに関連して組織され、こうしてそれぞれの音は先行する音を集約し、後続する音を予告するのである³⁷⁾。]

このような音楽の特徴から、デューイは、音楽が表現する特質は、衝撃や不安であると次のように言う。「音楽は、自然や人生の永続的背景の上に演ぜられる劇的变化たる衝撃と不安定、軋轢と和解などを必ず力強く表現する³⁸⁾。」そして、彫刻が表現する特質が安定と普遍であるのに対し、音楽の表現する特質は動揺と運動であると言う³⁹⁾。

以上から音楽は、感覚的性質の伴う音を媒介とし、これを表現としての形式の中で組織することで、動揺と運動等の感情的性質を表現する芸術であると言えよう。

(5) 文学 (literature)

ここで言う文学は、詩、散文、小説、戯曲等を指す。文学の媒介は、言葉 (words) である。媒介としての言葉には、音 (sound) が伴っている。まず、デューイは、言葉に伴う音の特性について、次のように述べる。文芸においては、音が直接媒介でもこれは音楽のような音ではない。言葉は、文学よりも前から存在していて、言葉は伝達の技術によって、ただの音から作られた⁴⁰⁾。

次にデューイは、文学での媒介となる言葉は、媒介としての素材との隔たりにないと言うところに特性があると指摘する⁴¹⁾。つまり、言葉は、母国語であり、この言葉には、子どもの時から経験した感情が込められている。このことから、言葉を媒介にする文学は、他の芸術と異なると見る。

言葉のこの特性ゆえに、他の芸術の経験をするときもこの言葉の中に内包された過去の経験によって彩られると次のように言う。「建築的、絵画的、彫刻的なものの意味は、言葉から生じた価値によって知らず識らずのうちに常に包まれて、豊富にされるのである⁴²⁾。」そして、デューイは、媒介としての言葉の力は、性格 (character) を表わすところにあると言う。「名詞や動詞や形容詞は、一般的状態、即ち性格を表現する。固有名詞でさえも個々の事物に限った性格なら表わすことができる⁴³⁾。」「言葉は、事物や事件の本性 (nature) を伝えようとする⁴⁴⁾。」「言葉はものの性格ないし本性を抽象的概念的な形で示すのではなく、個物の中に現れ、その中で作用するものとして伝えることができる⁴⁵⁾。]

以上から文学の媒介は、我々が子どもの頃から使う言葉であり、このことが文学の素材の身近さとなり、他の芸術にはない特性となる。そして、この言葉の表す特質は、事物の性格であると言えよう。

V まとめ

デューイの芸術の分類の考え方は、媒介によって区分するものである。この見地から芸術を大きく身体を媒介とするものと、身体以外に多くを依存するものに区分する。それは自動的芸術と形成芸術となる。自動的芸術は、舞踊や唄等である。形成芸術は、直接的に身体を用い表現するのではなく、道具を使って素材を処理して作る彫刻や建築等である。

そして、デューイは、この芸術の分類の考え方によって、諸芸術の媒介の特徴とそれによって表現する特質について、例えば、建築は安定性と持久性を、彫刻は完了、静止、釣り合いを表現するなど具体的に述べている。また、本論文で課題とした音楽は、音を媒介として動揺と運動等の感情的性質を、図画工作・美術の絵画は、色彩を媒介として事物の性質や状相を表現すると述べている。

ところが、デューイは、このように媒介で芸術を区分しても、そこで表現される特質は重なる部分があり、物を区別するには明確には分けられないと見ている。例えば絵画は、色彩による光と陰の揺曳によって、事物の性質や状相を表現するところに特徴があるが、この光と陰の揺曳という絵画的要素は、建築にも彫刻にも見られると言う。しかし、これは、建築や彫刻においては副次的な特質になるとみる。このようなことから、芸術を媒介によって区別するものの、そこで表現される特質は、共通性があり芸術としては連続しているという見解となる。

このようなデューイの芸術の分類の考え方に立つと、学校教育においても音楽と図画工作・美術を明確に区分して扱うのではなく、芸術的経験として連続しているという考え方を取ることが重要となる。

注

- 1) 竹内敏雄編集『美学事典』（第9版，弘文堂，1970年）
- 2) J. Dewey., *Art as Experience*, Capricorn Books, 1958 (1934), pp.243-244。鈴木康司訳，1969年，『芸術論——経験としての芸術——』春秋社，268-269頁。
- 3) *ibid.*, p.227. 鈴木訳，250頁。
- 4) *ibid.*, p.227. 鈴木訳，250頁。
- 5) *ibid.*, p.244. 鈴木訳，269頁。
- 6) *ibid.*, p.244. 鈴木訳，269頁。
- 7) *ibid.*, p.217. 鈴木訳，239頁。
- 8) *ibid.*, p.217. 鈴木訳，239頁。
- 9) *ibid.*, p.218. 鈴木訳，240頁。
- 10) *ibid.*, p.218. 鈴木訳，242頁。
- 11) *ibid.*, p.220. 鈴木訳，242頁。
- 12) *ibid.*, pp.222-223. 鈴木訳，245頁。
- 13) *ibid.*, p.223. 鈴木訳，245頁。
- 14) *ibid.*, p.221. 鈴木訳，243頁。
- 15) *ibid.*, p.221. 鈴木訳，243-244頁。
- 16) *ibid.*, p.226-227. 鈴木訳，249頁。
- 17) *ibid.*, p.227. 鈴木訳，249頁。
- 18) *ibid.*, p.230. 鈴木訳，253頁。
- 19) *ibid.*, p.230. 鈴木訳，253頁。
- 20) *ibid.*, p.230. 鈴木訳，253頁。
- 21) *ibid.*, p.230. 鈴木訳，253頁。
- 22) *ibid.*, p.230. 鈴木訳，253-254頁。
- 23) *ibid.*, p.232. 鈴木訳，256頁。
- 24) *ibid.*, p.233. 鈴木訳，256-257頁。
- 25) *ibid.*, p.232. 鈴木訳，256頁。
- 26) *ibid.*, pp.233-234. 鈴木訳，257頁。
- 27) *ibid.*, p.234. 鈴木訳，258頁。
- 28) *ibid.*, p.234. 鈴木訳，258頁。
- 29) *ibid.*, p.234. 鈴木訳，258頁。
- 30) *ibid.*, p.234. 鈴木訳，258頁。
- 31) *ibid.*, p.235. 鈴木訳，258頁。
- 32) *ibid.*, p.235. 鈴木訳，258頁。
- 33) *ibid.*, p.235. 鈴木訳，259頁。
- 34) *ibid.*, p.236. 鈴木訳，260頁。
- 35) *ibid.*, p.237. 鈴木訳，261頁。
- 36) *ibid.*, p.239. 鈴木訳，263頁。
- 37) *ibid.*, p.239. 鈴木訳，263頁。
- 38) *ibid.*, p.236. 鈴木訳，260頁。
- 39) *ibid.*, p.236. 鈴木訳，260頁。
- 40) *ibid.*, p.239. 鈴木訳，264頁。
- 41) *ibid.*, p.240. 鈴木訳，264頁。
- 42) *ibid.*, p.241. 鈴木訳，265頁。

- 43) *ibid.*, p. 243. 鈴木訳, 268頁。
- 44) *ibid.*, p. 243. 鈴木訳, 268頁。
- 45) *ibid.*, p. 243. 鈴木訳, 268頁。

Way of thinking of art classification as seen in J. Dewey's Art Experience Theory

NISHIZONO Yoshinobu

(Keywords : artistic experience, art classification, medium, automatic arts, shaping arts)

The aim of this paper is to suggest a curriculum or guidance method for art education materials in schools through making the way of thinking in Dewey's Art Experience classification clear. Dewey takes a classification way of thinking through the medium of art. From this standpoint, there are two main groups : the automatic arts which use the medium of the body (e.g. dancing, singing, etc.) and the shaping art (e.g. sculpture, architecture, etc.) which mainly exist outside of the body. Then, Dewey says that quality shown through the differences in the artistic medium will be unique, however, the quality shown is not classed in black and white, but has continuity. Following this, taking a continuous way of thinking as an artistic experience is important in the music and art materials of schools.